仮面ライダー空我　～青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェンド)～

千藤　光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダー空我　～青空の勇者（ニューヒーロー）・青空の伝説（ニューレジェンド）～

【Ｎコード】
Ｎ２９１４Ｗ

【作者名】
千藤　光

【あらすじ】
現実世界とほぼ同じ町、空ヶ丘……この世界では現実世界同様に平和で仮面ライダーが普通に放送されている。そんな町に住んでいる高校生、空野　輝（あきら）は空ヶ丘の青空と仮面ライダーが好きである。ある日、好きな女の子の目の前に謎の怪人が現れた。
「あの子を助けたい？」
その時輝は謎の少女に変身ベルト、アークルを手渡され、輝は仮面ライダー空我として空ヶ丘の青空を守ると決意する。
そしてある時、輝の親友、相葉　宏の目の前に記憶喪失で、ジュモ

クギアに変身できる青年、ミオが現れる。
果たして、怪人の目的とは!?ミオの正体とは!?そして輝はみんなの青空を守ることはできるのか!!!

（キャラの出演を許可してくださった新島先生、空我と一緒に戦うオリジナルライダーを考えてくれたS君、感謝します!!）

1話：勇者復活！！（前書き）

まず、何故こんなのを書くかというと、僕がクウガが好きだからです。
前からずっとクウガの小説を書きたいと思ってました。
ファイズの小説と掛け持ちになりましたが、頑張っていきます！！

1話：勇者復活！！

僕は空野　輝（あきら）！仮面ライダーとカレーと空ヶ丘の青空が好きな普通の高校1年生！

なんと僕は今から告白しに行くんだ！その子の名前は茜　ソラ　なんていい名前なんだ……

僕は今屋上に向かっている。僕はソラちゃんをそこへ呼び出したんだ！！あ～なんて言っ

「キャーーーーーーッ」

何だ？今の悲鳴。

急いでドアを開けるとそこには狼の顔をした怪物がいた。怪物は今にもソラちゃんに襲いかかろうとしていていた！

「やめろぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！！！」

走って行ったが間に合わない！！

鋭い爪がソラちゃんめがけて振り下ろされたその時、自分以外の全ての時間が止まった……

「何だ？これ？」

うろたえていると後ろから声がした。
「青春してるのね。君。」

そこには一人の少女が立っていた。
金髪のショートヘアーにその髪と同じ色のワンピースを着ている。
クセ毛なのか一本だけ毛が跳ねている。どっちかというと小柄で、
青い目のおかげで外国人と言うのはすぐ分かった。

「あの子を助けたい？」
少女は僕に問いかけてきた。
「当たり前だよ！どうやったら助けられるんだ！？」
僕の頭はそれだけでいっぱいだった。
僕がこんなところに呼び出したばかりにこんなことになってしまったんだ。

少女は口を開いた…
「カンタンよ。君が仮面ライダーになるの。」

仮面ライダーに？

そんなものはテレビの中の世界にしかないと思っていた……しかしこんな状況では信じざるを得ない。

「君にはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

僕は驚いた！

「アークルってたしか……壊されたんじゃ……」

アークル……仮面ライダークウガになるためのベルト……しかしそれはクウガの最終決戦で破壊されて今はもうないものだった。

「そのことについてはまた今度！今はあの子を助けるのが先よ。」

そう言って少女は僕にアークルを手渡した。

「よし！！一か八か……」

僕は腰にアークルを装着した！すると自分の体が光に包まれて……

ソラは今にも襲われそうだった。

「誰か……助けてぇぇぇぇぇ！！！！！」

そう叫んだ時、

「おりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

狼の怪物は飛び蹴りにより吹っ飛ばされた！！！

「ソラちゃん、大丈夫？」

そこには、かつてグロンギという古代から復活した怪物と戦っていた勇者（ヒーロー）が立っていた…

赤い装甲に黒のボディ、クワガタをモチーフとした角の一本折れている仮面……

仮面ライダー空我!!!

クウガは狼に向かって走っていく!!

「おらぁっだあっはあっ!!」

連続でパンチを喰らわす!

「どりゃあ!!」

さらに上段蹴りを喰らわす!!

金髪の少女が逆側の校舎の屋上から戦いを見ていた。

「2人目のクウガも強いわね〜。しかし、あの怪物は何なの?」

今クウガが戦っている怪物は前述にあるグロンギではない。ましてやどの仮面ライダーシリーズの怪物でも無いのだ。

「また仕事が増えそうね。今はあの子に任せるか……」

そう言って少女はどこかへ消えていった……

「はっだあっオラアッ！！」

クウガは有効的に怪物にダメージを与えている。

「よし！そろそろ…」

クウガが右足に力を溜める。

「はあぁぁぁぁ」

そして怪物に向かって走り出した！

クウガが空を舞う！

「だあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！！」

クウガは飛び蹴りを喰らわせた

クウガの必殺技、マイティキックが炸裂した！！

「グワァァァァァ」

怪物は断末魔と共に爆発した…

僕はクウガからもとの姿に戻った。

「ソラちゃん！大丈夫！！！」

僕は急いでソラちゃんの下へ走って行った。

「ひっく…グスッ…輝君…怖かったよぉぉぉ」

そう言ってソラちゃんは僕に抱きついてきた。

少しびっくりしたけど、ソラちゃんは本当に怖がっていた。僕が悪い。僕がこんなところに呼び出したから……

「ごめんね、ソラちゃん。僕がこんなところに呼び出したから……怖かっただろ？もうこんな思いはさせないから。僕がずっと守ってあげるから……！！」

そう言ってソラちゃんをぎゅっと抱きしめた。

僕はソラちゃんを……空ヶ丘を……みんなの青空を守るんだ！！！

そう心に誓った。

次回の仮面ライダー空我は！！

「あの怪物って……」

「ラミカって呼んで！」

「お前夢でも見ていたんだよ！」

「超変身！！！」

次回、超変身！水の青龍の力！！

青空を守る為に戦え！！！！

1話：勇者復活！！（後書き）

なんかオーソドックスな感じになりましたが後悔はしてません。
僕の永遠の心のヒーロー、クウガを小説に出来てとても楽しいです！

この話を作るにあたり、ラミカ出演の許可を出してくださった新嶋先生、素敵なキャラにしてみせます、新嶋先生のとある顎門（アギト）の交錯（クロス）覚醒（ライズ）のキャラです。こちらの方が面白いので、僕のヘタクソな小説より、こちらの方が千倍面白いので、読んでみてください。

オリジナルライダー？まだまだです。しかしすぐ出します。お楽しみに～～

2話：超変身！水の青龍の力！！（前書き）

前回のあらすじ

「止めろぉぉぉぉぉぉ！！！！」

「あなたにはこの変身ベルト、アークルを託すわ。」

ドカァーーーン

「みんなの青空を守ってみせる！！」

2話：超変身！水の青龍の力！！

昨日はあの後大変だった。

屋上でいきなり爆発音がしたんだ。騒ぎになってもおかしくない。僕とソラちゃんはあの後警察から事情聴取を受けたのだけれど、怪人が現れて、それを僕がクウガになって倒したと言っても誰も信じてくれなかった。おかげで教室では朝からクラスメイトに質問攻めだよ……

「アキラ！昨日ソラに何したのよ！！」

「何度も言ってるじゃないか！！いきなり狼みたいな怪人が現れて……」

「もっとマシなウソはつけないの！？もう聞き飽きたわよ！どうせ青空がどうのこうのとか言ってなんかしたんでしょ！！」

「だから、本当に……」

「もういいわよ！！厨二病の相手してるとこっちまでそうなっちゃいそうよ！」

そう言ってソラちゃんの親友の女の子は僕から離れた。そして最後に僕にこう言った。

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃうわよ！」

どうして誰も信じてくれないんだろう……まぁ、それもそうだよね。
こんな話して信じる人はまずいないよね。
だけど近づかないではひどいよ……

僕は諦めて自分の席に戻った。そして空を見た。

「父さんは信じてくれるよね……」

空ヶ丘の青空は僕に元気をくれる。空ヶ丘の青空はいつも違う表情を見せるんだ。僕はその表情を見るのがとても好きなんだ！
こんなことをみんなに言ってからかな。みんなが僕を変わり者って言い始めたのは……

時間は過ぎて行き、放課後、僕は帰路についていた。

僕は昨日あったことについて考えた。
あの怪人のこと、２本目のアークルのこと、金髪の女の子のこと……

「あ～き～らぁぁぁっ！」

そう聞こえた後で、背中に重い衝撃が走った。

「ギャッ！」

「相変わらず輝は鈍いな～～」

「いきなり膝蹴りとかひどいよ…」

彼の名前は相葉　宏、僕の親友だ。

「昨日フられた？」

「いきなりそれ？昨日はそれどころではなかったんだよ。」

「やっぱり昨日のこと本当なんだ。」

「宏君！信じてくれるの！？」

「昨日ソラちゃんに嫌がらせをして嫌われたこと！」

「宏君も！？？だからほんっっっとうに昨日は……」

「はいはいわかった信じるよ。」

「なんだよその言い方！」

そんなことを言いながら帰っていると後ろから誰かに呼び止められた。

「ちょっと君達いいかしら？」

そこには昨日僕にアークルを託したあの金髪の女の子がいた。

「ちょっお前なんでこんな金髪美少女と知り合いなの!?」

「だから言ったことは本当だろ?この子が僕にアークルを渡したんだよ。」

「どうせ出任せのウソだろ?大体何だよアークルって?」

「だからこの子は僕にクウガの変身ベルトのアークルを手渡した……ごめん、誰だっけ?」

昨日僕は戦いに夢中であの子の名前を聞き忘れていた…

「私はラミカ・リュミネート、ラミカって読んで!」

そう言ってラミカは微笑んだ。

「オレは相葉宏!野草とか草木についてはオレに任せてください!!」

「ちょっ宏君!?君は関係ないじゃん!!」

「え~い~じゃん!!」

その様子を見てラミカはクスリと笑った。

「さあ、君の自己紹介はまだだったわね。」

ふぅ。やっと自己紹介できる。

「僕の名前は空野輝。僕は仮面ライダーには詳しいかな～」

僕がそういった直後、ラミカちゃんの顔はこわばった。

「仮面ライダーを知ってるの？」

ラミカちゃんは僕に質問してきた。

「知ってるも何も仮面ライダーって超有名だよ！けどどうして？」

「まずいことになったわねぇ。どこかゆっくり話のできるところはある？」

ラミカちゃんは少し焦っている様子だった。

「だったら僕の家に来るといいよ！」

ラミカちゃんと僕は家まで行くことにした。宏君はいると面倒なので、先に返した。

しばらくして……

僕達は家についた。

「家って……これ？……」

「そうだよ。」

ラミカちゃんは驚いていた。
それもそのはず、そこは喫茶店だったからだ。
僕は姉と一緒にとある事情で喫茶店、『マイペンライ』に居候している。

僕達はマイペンライに入って行った。

「ただいま！！おやっさん！！！」

おやっさんはここの店長である。顔は少々老けているが、４０代には見えない体をしている。

「おかえり！輝君。その子は？」

「昨日言った女の子。」

「ラミカ・リュミネートと言います。」

そういってラミカちゃんはおやっさんに礼をした。

「おやっさん！しろくま2つ！」

とりあえずそれを注文して、テーブルに座った。

「まず、何か聞きたいことはあるかしら。」

僕は一番の疑問をぶつけて見た。

「君は何なの？」

「まあ，詳しくは言えないけど，異世界って信じる？」

ラミカちゃんはいきなり妙なことを言ってきたが，だいたい察しはついている。

「まさか，ディケイドみたいに世界を旅しているとか！？」

「まあ，そんな感じね。仮面ライダーを知っているとなると話しやすいわね。他に聞きたいことは？」

「なんでアークルが二本もあるの？」

「あなたは昔、クウガは2人いたっていうことを知っているかしら。」

「マジで？本当に？」

「ハイしろくまお待ち！！！」

かき氷のシロップの代わりに練乳をかけた白いかき氷、南国名物しろくまが運ばれてきた。

「クウガが古代の戦士だってのは知っているわよね？」

「うん」

「古代のクウガは2人でグロンギと戦っていて，戦っている最中に一人が戦死したの。そして、その死体で作ったものがゴウラムなの。」

「へ～」

知らなかった……クウガの設定も考古学見たいだ。

「するとこのアークルは……」

僕はラミカちゃんに聞いてみる。

「そう！その戦死したクウガのものよ。」

しかしまた新たな疑問が
生まれた。

「どうしてそんなのもっているの。」

「仲間に託されたの。新しい変身者が現れるまで持っててろって」

そこまで言ったとき、放送が流れた。

ぴーんぽーんぽーんぽーん

空ヶ丘3丁目で謎の怪人が暴れています。市民の皆さんは外出を控えるようにしてください。繰り返します。空ヶ丘3丁目……

ここから近い！

僕はラミカちゃんと一緒に現場へと向かった。

そこにはトラの怪人がいた。腕には大きなカギ爪がついてみた。

「そこまでだ！！」

輝はトラの怪人の前に立ちふさがる！

輝は腹部に両手を構える。するとクウガへの変身ベルト、アークルが出現する。

輝は右手を斜め左に、左手をアークルの上に乗せて横に動かす。そして叫ぶ

「変身！！！」

そう言って輝は両手を重ね合わせ、左側のスイッチを押す。

すると輝は古代の戦士、黒いボディに赤の装甲の仮面ライダー空我に変身した！

クウガはトラに攻撃を仕掛ける。しかし、カギ爪で受け止められ、押し返される。トラはものすごいスピードでクウガを攻撃する。早過ぎてクウガは対応しきれない。一方的にクウガは攻められている。

「グルルルルル……ガアッ！グアァ！」

「ガッ！ウワァッ！」

こんなとき、どうすれば……？

その時、ふと転がっていたほうきがクウガの目に止まった。

よし！

クウガは攻撃をよけ、ほうきを拾い、再び変身ポーズをとる。

「超変身！！！」

するとクウガの装甲と複眼が青くなり、仮面ライダー空我、水青龍（ドラゴン）の姿（フォーム）へと姿を変えた！

「グワアァァァァ！！！」

トラが襲いかかってくるが、最小限の力で避けて、ほうきを変化させたドラゴンロッドで間合いを取る。また襲いかかってくるトラの攻撃を避けてドラゴンロッドで叩きつける。さらにトラの体を連続で突きまくる！！！

「ハアアアアアアッ！」

ロッドに力を溜める。そして最後の一撃を叩き込む！！！！

「うぅ……呪い……せっかく集めた呪いがぁぁぁぁぁっ。ギャアアアアアアアッ」

断末魔と共にトラの怪人は爆発した。

呪い？

クウガの頭にまた一つ疑問が残った……

僕は変身を解いた。

「あの怪人って……何だろう……」

ラミカのケータイがなる。ラミカのケータイは，ダークグレーのボディに黄色いラインのはいった特徴的なケータイである。

「もしもし？」

「チャーッス！」

相手はなんかしょっぱい敬語を使っている。

「あなただったのね。マモル」

「ラミカさん！バカンスはどうっすか？」

「それが……」

ラミカはこれまでのことを話した

「ヤバいことに巻き込まれたっすね…しばらくはそこに滞在して詳

しく調査して欲しいっす。」

「わかったわ。」

そう言ってラミカはケータイを閉じた。

次回の仮面ライダー空我は！

グギュルルルルルルル

「記憶喪失？」

「だったらここに住もうよ！！」

「オレも……仮面ライダーに……」

次回、第２の仮面ライダー、樹木

みんなの青空を守るために戦え！！！

2話：超変身！水の青龍の力！！（後書き）

終わった……眠い……

今日体育祭でフォーゼ見れなかった。

ので体育祭での報告

1．徒競走で1位になった。

2青団が弱すぎて紅組に優勝をかっさらわれる。

閉会式で校長がと放送部がオンドゥルしまくった

日常のｏｐが流れた。

文章がひどいのは、すごく眠いからです。（このあと加筆修正しました。）

3話：第2の仮面ライダー、樹木（前書き）

前回のあらすじ

「もう二度とソラには近づかないで！ソラにも厨二病が移っちゃうわよ！！」

「古代にはクウガが2人いたって知ってる？」

「超変身！！」

「とりあえずそこで調査してほしいっす。」

3話：第2の仮面ライダー、樹木

トラの怪人を倒した後をよく見渡してみると、周りは滅茶苦茶だった……

「ひどい……」

家のガラスは割れていて、停めてあった車はひっくり返っていた。

あいつら絶対許せない……

そう思っていると聞き慣れた声がした

「あああああああああ輝!?こっ…コレ何だょ!??」

「宏君!?大丈夫だった!?」

「おおおおお前の言ったこと本当だったの?」

宏君はだいぶ怯えていた。

「言ったでしょ!僕は仮面ライダーになったって!自分で言うのも何だけど僕は厨二病じゃないんだからね!」

「あれって確か、アギトって言ったっけ……」

「クウガだよ！！！」

良かった。大丈夫みたいだ。他に犠牲者もいないようだし帰って食べかけのしろくまを食べるか。

「そういえばラミカちゃんどこだ？」

戦っている最中にいなくなったみたいだ。

「あっいたいた！輝！」

すると向こうからラミカちゃんが走って来た。

「あっラミカちゃん！どこ行ってたの？」

「ちょっと電話がかかってきて……」

「ああ全然大丈夫ですよ！」

「何で宏君が答えるのさ！」

とかツッコミを入れいると、ラミカちゃんが口を開いた。

「あの～？」

「何？」

「ここらへんに宿とかないかしら？」

「へっ？何で？」

「さっきの電話で仲間からここに滞在してあの怪人を調査してほしいって言われて……」

ん～～。そんなこと言われてもここらに宿とかないし……

そうだ！

「家にくればいいよ！」

「へっ？」

「マイペンライって喫茶店だけど、下宿もやってるし、僕もクウガとして戦っているからちょうどいいでしょ。」

「それもそうね。じゃあお願いしようかしら！」

「輝お前ソラちゃんという人がいながらぁぁぁぁ！！！！」

そう言って宏君が首を絞めてきた。

「別にそういう意味じゃ……」

そこは薄暗かった。

カツカツカツカツ

白衣を着た女が歩いてくる。

「T33もやられました。」

声の先にはマントを着ていて、フードをかなり深く被った男が座っていた。

「別にいい。あれは捨て駒だ……。クウガか……やはりあいつらは邪魔をしてきたか……」

そう言ってマント男は立ち上がり、ネジマキをオリの大鷲にネジマ

キを差し込んだ。

「行って来い……Ｈ５２……」

ネジマキを差し込まれた大鷲はみるみる姿を変えていった……

宏は一人で歩いていた。

「チキショー！あいつハーレムでもしたいのか！？」

訳の分からない独り言を言っていると、あることに気がついた。

あれ？人が倒れているし……

グギュルルルルルルル

１０ｍも離れていたのに腹の音が聞こえ来た。

「あの人、ソートーヤバいでしょ……」

宏は倒れている男に近づいた。男は二十歳くらいだろうか…まだ若い顔をしていた。

「大丈夫ですか？」

声をかけると男はこっちを見てこう言った。

「腹減った～～お願い何でもいいから何か食わせて～～！！」

宏は困った。今はお金持ってないし、食料もない。どうしようか迷っていると、あることに気づいた。

ここ、河川敷の土手じゃん！

宏は土手を降り、いくつか草を抜いて来た。

「ホイ！これ食える野草だから！！」

そう言って男に抜いて来た草を渡した。

男はそれを奪い取り、むさぼりついた。

「うめえええええええええええええええっ！！！！！！！！」

「えーっ！まだ何もつけてないのに！？」

「ヤバいうまいよ！マジでありがとー！！！！！」

相当腹が減っていたんだろう。男は泣いていた。

「そういえばどうして行き倒れてたんだ？」

気になっていた言葉を口にしてみた。

「えっと……何でだ？……そもそもオレ誰だ……ヤバい。思い出せない……」

「まさか、記憶喪失？」

宏はとにかく焦った。

「なんか思い出せるものはないの！？何か……何でもいいから！？」

「えっと～～～」

2人がやいやいやっている時、どこからか大鷲の怪人が宏の前に飛来してきた。

バサッバサッ

「お前の呪いを奪わせてもらう。」

「ちょっ、今それどころじゃ……」

宏が後ずさりすると、男が手を叩いていった。

「あっ思い出した。オレは……」

男も場の変化に気づいたみたいだった。

男はおもむろに空中前転をした。すると男の体は光に包まれ、ベルトへと姿を変えた！

宏はベルトをつかんだ。するとベルトから声が聞こえた。

「オイ！オレ一つ思い出した！！オレは変身ベルトのジュモクギアに変身できるんだった！！」

「はあ！？？」

宏は驚いていた。

「変身ベルトに変身ってなんなんだよ！！」

大鷲は今にも襲ってきそうだった。

「お前が仮面ライダー樹木になるんだよ！！」

ジュモクギアは叫ぶ！

「オレが……仮面ライダーに……」

「そうだ！オレを装着して変身って叫べ！」

「ああもうどうにでもなれ！！！」

そう言ってベルトを装着して、左手を上に上げ、右手でバックルのレバーをつかむ。

「変身！！！」

そう叫び、レバーを右から左に動かす。すると体が木の葉に包まれ、緑のボディにクウガとは対照的に機械的な装甲、カブトムシをモチーフにした角張った仮面の仮面ライダー樹木へと姿を変えた！！！！

「何！？」

大鷲は驚いている。

「おぉ。」

樹木は感嘆の声をあげる。

「来るぞ！」

大鷲はさっきのトラと同じくらい鋭い爪で襲って来る。

ガィン！

それを左腕で受け止め、はじき返す。

「らあぁぁぁぁっ！！」

重いパンチを大鷲に喰らわす！

「でいっ！ダァッ！おりゃあっ！」

さらにパンチを喰らわす！

「オイ、ベルトの右側のこれ使え！」

そう言われ、右側を見ると、何やらゼンマイがついている。

「ベルトの真ん中にそれを差し込んで武器を呼び出せ！」

樹木は『リーフブレード』と刻まれたゼンマイを取り出し、ベルトの真ん中につけて回してみる。

リーフブレード！！！！

電子音がした後に緑色の剣、リーフブレードが現れる！
樹木はそれをつかみ、大鷲を斬りつける！
「たぁっ！はあっ！セイッ！」
「ガッ！ギャッ！があっ！」
大鷲は片膝をついた！
「よし！必殺技だ！」
「ええっ！オレキックとかムリだからな！」
「うわっ！マジかよ！じゃあカンタンなの教えるから……。」
もうリーフブレードは直されていた。
「まず、両手に力を蓄えろ。」
樹木はカメハメハのポーズをとる。
「はあぁぁぁぁぁぁぁっ」
ジュモクギアは叫ぶ！
「打ち出せえええええ！！！！」
「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

気合い玉を大鷲にお見舞いする。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

大鷲は爆発した。

樹木はレバーを戻して変身を解いた。

男も変身を解く。

「悪かったな。少年……あの草うまかったぜ！」

そう言って男は帰ろうとした。

「待てよ！！！」

男は宏に呼び止められた。

「これからどうすんだよ……」

「さあな。」

男はそっけなく答える。

「オレん家にこい。」

宏は力強く言った。宏は無意識に口に出していた。

「お前といっしょならまた怪人が攻めてきても大丈夫だろ。オレは相葉宏、よろしくな！」

そう言って宏はてを差し出した。

男と宏は握手をした。

「オレは……名前分からないんだった！」

男は笑った。

宏がふと男の着ているジャケットに目をやると、何やら書いていた。

「M……I……O……。よし！お前の名前はミオだ！」

「ミオか！いい名前じゃねえか！！」

笑いながら2人は河川敷の道を歩いていった……

ここはマイペンライ！

おやっさん曰わく、マイペンライとはタイ語で＞大丈夫＜というみたいだ。

今、僕たちは店内でマイペンライ特製の納豆カレーを食べている。

僕たちというのは、僕とおやっさんとラミカちゃんとお姉ちゃん、美咲の４人だ。

「なんか突然すみません。」

ラミカちゃんがニンジンを僕の皿に移しながら言う。

「大丈夫だよ！部屋はいくつも空いているしね！」

そう言ったおやっさんは納豆のかかっているカレーにさらにソースをかけている。

「昨日の話本当だったんだ。」

お姉ちゃんがカレーを頬張りながら言う。

「やっぱり信じてなかったんだ……」

今のところ信じてくれているのはおやっさんと宏君とお姉ちゃんだけである。

「はあ～」

ため息をつきながらニンジンまみれになったカレーを口に運んだ。

ニンジン美味しいのに……

そう思いながらラミカちゃんの顔を見ると、なんか寂しそうだった。

「どうしたの？」

「ううん！ただ昔を思い出していただけだから。」

そう言ってニンジンのなくなったカレーを口に入れた。

まあいいや。よし！明日もがんばるぞ！！

そう思い、僕は納豆ニンジンカレーをかきこんだ。

次回の仮面ライダー空我は！

「輝君……なんか……ごめん。」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「ツノ一本折れてるの！？」

「これだ！」

次回、攻めのレイニー！守りのタイタン！！

青空を守るために戦え！！

3話：第2の仮面ライダー、樹木（後書き）

まず、新嶋先生！ラミカの設定を少しいじってごめんなさい！こうすれば可愛くなると独断で決めてしまいました！

さて、仮面ライダー樹木こそ、あのS君が考えたオリジナルライダーです。
しかし、人がベルトに変身以外は設定をかなりいじりました。
本来ミオは２０代ではなく、５０代の忠☆尾という男で、変身も、ゼンマイを回した後、ワインダーを引いて、エンジンをかけて、変身するというので、（もちろん環境に悪い。）極めつけは必殺技がギャリック砲というかなりむちゃくちゃな設定でした。
これでは正義のヒーロー、仮面ライダーではないので変えました。
S君文句があるなら感想によろ～～～（＾―＾）／～～～
では。

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！1／2（前書き）

前回のあらすじ

「だったら家に来なよ！」

「ありがと～～すげーうまかった～～！」

「変身！！」

「打ち込めぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

「ううん。ただ昔を思い出していただけだから！」

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！1／2

（ああ～～どうしよう……）

輝はすごく悩んでいた。

輝は初めてクウガに変身したことを思い出していた。

『ソラちゃん。怖かっただろ。』

（いくらノリといっても付き合ってもいない女の子を抱きしめるのはヤバかったかな～。絶対ソラちゃんに嫌われたよ～～）

「嗚呼……」

今更である（笑）

「ぅあ～～～きぃ～～～らあぁぁぁぁぁぁッ！！」

いきなり宏が席に座っている輝に強引にドロップキックを打ち込む。

「グァハヘェア」

ガッシャーン！！

輝、机、椅子、鞄が真横に吹っ飛んでいった。

「ぐぉぉぉぉ。いちいち宏君は登場がバイオレンスなんだよ……」

苦悶の表情を浮かべながら上に乗っかった机をどかしながらふらふらと立ち上がる。

「何？今度はどうした……」

輝は宏を見て絶句した。

「……」

宏がドロップキックの着地を頭からしてしまい、只今宏は頭を抑え、絶賛悶絶中であった。

「できないならやるなよ！！！！」

（、・ω・、）しばらくして

まず宏が口を開いた。

「実はな、オレな、何になったと思う？」

「宏君？日本語になってないよ。」

宏のアホさに輝はただただ呆れるだけである。

「んで？何になったの？」

また妙なことをいうんだろ、と心の中で呟きながら、宏の返信を待つ。

「実は、オレ、ついに……」

「うんうん。」

輝は次の言葉を聞くまでは、宏をただのアホな親友としか見ていなかった。

「仮面ライダーになったんだ！！」

輝の目は輝いた。

「えっ！マジで！！！」

宏は樹木に変身した時のことをこと細かに説明した。

「すっげー！変身ベルトに変身ってカッコイ～～！」

「エヘヘ。もっと誉めて～～ん」

まあ、輝が誉めているのは、宏ではなく、ミオなのであるが……

「ま～たあの二人おかしな会話してる。」

そう言ったのは、輝を厨二病呼ばわりしたあのブスである。（自分の顔も解らずに人のことやたらめったらいうやつたまにいるよね～。）

「ねぇ、ソラ。なんであいつのことが好きなの？」

ブスとは別の少女がソラに話しかける。

「あの時……私のこと……守ってくれるって言ったから……。」

顔を赤らめながら、その時を思い出すかのように、ゆっくりと茜ソラは言葉を紡ぐ。

「あの時って？」

「輝君が初めて仮面ライダーになった時…かな？」

少し恥ずかしそうに微笑む。

「ソラ！まだそんなこと言ってるの！？」

ブスが机を叩きながらソラに訴えかける。

「なんで信じてくれないの？」

ソラは、輝同様に困っていた。あの時の話をしても、一向に誰も信じてくれないのである。

ここは、現実。何も見ていない人はそんなことを言われても、テレビの中のことが現実に起こるはずはないと相手にしてくれないのが、正しい対応である。しかし、ソラも輝も宏もしっかりこの目で見てるのである。

「放送だって流れたじゃん！」

これなら、みんな聞いているから知っているはず！そう思い提示した言葉だったが、一蹴された。

「どーせ訓練かなんかでしょ。」

「何よ！三丁目で怪人が暴れてるって！」

アッハッハッハッハッハ

二人は笑っていた。

「どうして……危ないのに……」

ソラは初めて、彼女らは本当に友達なのかと疑問に思った。

カツカツカツカツカツカツカツカツ

白衣を着た女が薄暗い廊下を歩いている。
女は実験室のような場所へと入って行く。

「Ｐ６０２，Ｆ３７，サンプルは準備できました。」

白衣の女は、ネジまきの入ったトレーを、黒いフードを顔が隠れるまでかぶった男に渡した。

「実験は良くも悪くも、予想の範囲内だ。ただ……」

「ただ？」

「仮面ライダーの出現以外は……」

男はトレーを受け取り、まるで動物園かというくらいの動物の檻に歩みよる。

「空我……樹木……目障りだ……」

男は、ゴリラとトカゲにそれぞれネジまきを差し込んだ……

～～Ａｆｔａｒ　Ｓｃｈｏｏｌ～～

輝と宏はマイペンライへと入った。どこからつれて来たのか、ミオも一緒だ。

「ただいま～～」

「こんちは～っす」

「アニョハセヨー」

（宏君、記憶喪失をいいことに妙なこと教えているな？）

きっとこれは韓流ブームに悪ノリしてしまったせいだろうと輝は思い、３人はマイペンライへと入ってゆく。

するとそこには、おやっさん、輝の姉、黄色いセーラー服を着たラミカの他に、見慣れない人がいた。その人は長いジャケットをスーツの上から羽織っていた。

「おお、輝君、宏君、お帰り！」

おやっさんは2人に2人に手を振ってあいさつした。

「その人は？」

輝が問いかけると、ジャケットの男はこっちを振り向き、スーツのポケットから、手帳を取り出し、言った。

「初めまして。空ヶ丘署飯島と言います。」

飯島は警察手帳を取り出し、頭を下げた。

（刑事さんが何の用だ？）

不思議に思い、ふと横を見た。

すると宏がすごい顔で青ざめていた。

（えっ？はっ？どうしたの？？）

すると宏が口を開いた。

「す……す……す……すみませんでしたぁぁぁぁぁっ！！！」

（（（（（えええぇえぇえええええぇぇえええぇぇぇええぇえええぇ
え！！！？？？）））））

To be continued

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！1／2（後書き）

まず、更新遅れてすみませんでした！！！
9月半ばにスランプに陥り、スランプも脱したころ、ファイズ進め初めて、そろそろ空我と思ったら、魔のテスト期間に入ってしまったというわけです。
正直、ここまで溜めるつもりは全くありませんでした。

次に、ラミカの衣装ですが、黄色いワンピースから、黄色いセーラー服に変えようと思います。理由は、黄色いワンピースというのが、いまいちイメージしづらいからです。そして、異世界から来た人だから、少し変化が欲しいなぁ～と思ったからです。新嶋先生、たびたびすみません！

最後に、この小説を書いている理由です。
1話で、「クウガが好きだから」と書きましたが、それより重要な理由があります。それは、「もし現実世界にいきなり怪人が現れて、自分が仮面ライダーになったら」という話を、この小説サイトにくる前から考えてたからです。けど、輝とオレは性格全く真逆です。どっちかというと、ファイズＮｅｘの沢村巧の方が性格近いです（笑）
空ヶ丘が現実の世界ということを再認識させるための回でした。
次回はついにバトルです！期待せずに待っていてください。すぐ書けると思います。
では（＾＿＾）／～～～～～

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！2／2（前書き）

続きどうぞ

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！2／2

「ちょっ、宏君!?何やったの!!?」

宏を起こしながら輝は宏に問いかけた。

「えっ?あ。いゃあ特に何もしてないよ。」

「「「「「何じゃそりゃ！」」」」」

5人がずっこけたのは言うまでもない。

「いや～、条件反射ってやつ?アッハッハッハッハッ」

（アッハッハッハッハ～じゃないよ。まったく。）

「ええと、話を進めていいかな?」

輝が呆れていると、飯島が一歩前に歩みよってきた。

「実は、ここ最近未確認生命体が暴れているという通報が何件かきているので、聞き込みをしていたところなのです」

すると輝は飯島に気になることを聞いてみた。

「あの事信じているんですか?」

飯島はポケットから少し大きめの茶封筒を取り出しながら続けた。

「証拠写真が沢山あるのでね。」

そう言って飯島は茶封筒から何枚か写真を取り出した。

「あっ！これオレだ！」

そう言って宏は樹木と大鷲が戦っている写真を手にとり、ニヤニヤしながら眺めていた。

「あの～、オレというのは……」

輝と宏は自分が仮面ライダーであることを詳しく話した。

「なるほど……君達が……」

宏は満足げにふんぞり返っていたが、輝だけが写真を手に、震えていた。

「こんなの……クウガじゃないよ……角が一本折れてるなんて……」

「当たり前よ。一度死んでいるのよ！歴戦の勇士と思えばいいの！」

ラミカが写真を覗き込みながら言った。

「私たち空ヶ丘署は、未確認生命体特別対策本部を設置しているので、もしまた何かあったら連絡ください。では私はこれで。」

そう言って飯島は名刺をカウンターに置いて帰っていった。

「警察かぁ～」

（何かクウガ本編と同じ感じになってきたなぁ～）

そう思い輝が鞄を下ろした時、おやっさんが笑顔で輝に近寄ってきた。

「悪いけど、買い出ししてきて。」

～～とある通り～～

輝「何で2人もついてくるのさ…」

宏「パトロールも兼ねてだよ！」

ミオ「社会勉強もしたいしね」

まあ、いいか。

輝がそんなことを思っていると、どこからか、例の未確認生命体が3人に襲いかかってきた。

「「「ワアアッ！」」」

一方は、鎧をつけたゴリラ、もう一方は炎を身に纏ったオオトカゲ。

「いくぞ！ミオ！」

「おお！」

ミオはジュモクドライバーに変身し、宏はそれを腰に装着する。

輝は変身ベルト、アークルを出現させ、変身ポーズをとる。

「「変身！！！」」

輝はアークルの左側で手を重ね、スイッチを押すようにして、クウ

ガに変身する。
宏はベルトのレバーを１８０度動かす。宏の身体は木の葉に包まれ、樹木へと変身する。

「「シャアっ」」

クウガは鎧ゴリラに、樹木はオオトカゲへと攻撃をしかける。

「ウワァッ」

クウガはいきなりゴリラに吹っ飛ばされた。

クウガは近くに鉄パイプが落ちているのに気がついた。

「これなら防御力を強化して、吹っ飛ばされないはず！」

クウガは鉄パイプを拾い上げ、再び変身ポーズをとる。

「超変身！」

クウガは赤のマイティフォームから、騎士の鎧を彷彿とさせる装甲のタイタンフォームへとフォームチェンジした。

一方樹木は……

「ウワァッ！絶対不利だって！！！」

樹木は炎攻撃をただ避けるばかりであった。

「フォームチェンジだ！」

ジュモクドライバーが叫ぶ。

「左側のゼンマイ！」

「ん～と」

これだ！

樹木は雨と書かれたゼンマイをバックルに差し込む。

＞レイニーフォーム！＜

電子音と共に、緑のボディから、水色のボディのレイニーフォームへとチェンジした。

クウガ

「タアッ！ハアッ！ドリャア！」

クウガはタイタンソードで鎧ゴリラを切りつけていく。

「ガアアアッ」

鎧ゴリラのパンチが決まる！しかし、装甲の厚いタイタンフォームの前ではそんなものは無意味なのである！

「ハアッ！ダアッ！オォリャッ！」

ギィンギィンギィン

鎧ゴリラはどんどん斬りつけられていく。

そろそろ

「ハアァァァァッ」

クウガがタイタンソードにパワーを溜める。

「リャアアアアアアアアッ！！！！」

クウガはタイタンソードを振りかざし、鎧ゴリラをまっぷたつにたたっ切った！

「ギャアアアア！」

鎧ゴリラは爆発した。

樹木

バシュン！バシュン！バシュン！

樹木はレイニーフォームの武器、レインシャワーガンで水の弾丸を炎を纏ったオオトカゲに打ち込んでいる。

「グエエエエエエ！」

炎に水はかなり相性がいい。

「よし！トドメだ！ガンにゼンマイを差し込め！」

樹木は右側から、チャージショットと書かれたゼンマイをシャワーガンに差し込む。

＞レイニーパワーチャージ！＜

水の力を最大限まで溜め込み、チャージショットをオオトカゲに打ち込む。

「ギャアアアア！」

ドカーン！

オオトカゲも爆発した。

2人は変身を解いた。

「何だこれ？」

輝はオオトカゲが爆発したあとに、ゼンマイが落ちているのを見つけ、拾い上げた。

「Ｅｒｒｏｒ？」

次回の仮面ライダー空我は！

あなたも乗りたい？

ッチャース！

今、僕は大空を……

ドオッドドドドトドロボーっ！！

次回！大空へ羽ばたくマシン！

青空を守るために、戦え！！

4話：攻めのレイニー！守りのタイタン！2／2（後書き）

次回予告通りに行かないことがよくあるので、注意して下さい。そして、またしばらくお休みします。次は実力テストがあります。スイマセン！

感想＆amp;お気に入り登録お願いします！では（^―^）／~~~~

5話：大空へ羽ばたくマシン！（前書き）

前回のあらすじ

「実は俺！仮面ライダーになったんだ！」

「空ヶ丘署の飯島です。」

「歴戦の勇士と思えばいいの！」

「レイニーフォーム！」

「ｅｒｒｏｒ？」

5話：大空へ羽ばたくマシン！

輝は炎オオトカゲが爆発した所から、一本のネジ巻きを拾い上げた。

「Ｅｒｏｏｒ？なんだこれ……」

輝は不思議そうにネジ巻きを見ていた。

「そういえばお前の方は？」

宏は鎧ゴリラが爆発した所に行ってみた。

しかしそこにあったネジ巻きはクウガタイタンフォームの必殺技で真っ二つになっていた。

「バカァァァ！少しは考えろ！」

宏が輝に跳び蹴りを喰らわす。

「ギャッ！」

輝は衝撃でネジ巻きを取り落とす。

「だって知らないんだもん！」

そう言ってネジ巻きを拾い上げようとすると……

「あれっ！？」

なんとネジ巻きがみるみる消滅して行って、遂には消えてしまったのだ。

「どういうことだ？……」

二人は驚きを隠せない。

「とりあえずこれだけでも飯島さんのとこ持っていくか。」

宏はそう言って真っ二つになったネジ巻きをポケットに入れ歩き出した

「戻ってきました。」

白衣の女の手にはさっきのネジ巻きがあった。

「まだまだ駒は増やせるな……」

黒マントの男は不敵に笑ってみせる。

「樹木の行動は想定内だが……やっぱりクウガは邪魔だ……早めに排除せねば……」

そう言って別のネジ巻きを手でもてあそんでいた。

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

次の日

輝はグラウンドにいた。
それは何故かというと

（よし！飛ぶぞ！！）
「行きます！」

輝は一声叫び、走り高跳びのバーへと走っていった。

輝はバーの手前で片足を踏ん張る！

（よし！これで大空を飛ぶように……）

イメージはしたが上手く行かず……

「ウギャッ！」

輝は背中をモロにバーにぶつけた。

「いって～……ってうわぁぁぁ！！」

そして輝が失敗した拍子に支えの支柱も輝の元へ倒れてくる！

しかしそれは練習をすべて見てた宏によって防がれた。

「ったく。何でまた陸上部なんかに……」

そう、輝は何故かいきなり陸上部に入ったのだ。

「体鍛えようかな～って思って……」

輝は苦笑を浮かべながら言う。

「だったらボクシング部があったじゃん！」

「いや、そこにもいったんだよ！」

～～～～～

ボクシング部

部長「どうしてここに入ろうと思った。」

輝「強くなりたいからです！」

部長「ボクシング部をなめるなぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

そう言われ輝はボクシング部の練習場から放り出された（物理的に）

～～～～～

「なるほどな～。」

宏は高跳びのマットに座って腕を組み、うんうんと頷いてみせる。

「じゃあ柔道部は！？」

隣に座った輝の方を向いて聞く。

「いったけどさ……」

～～～～～

柔道部

どっかの高校の柔道部「たのも～～」

うちの柔道部「なんじゃコラァ！」

どっかの高校の柔道部「先輩の仇打ちじゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

部長「上等じゃあぁぁぁぁぁぁっ！やれぇぇぇぇぇぇ！」

全柔道部全員「「「「「「「「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」」」」」」」」

覗いてた輝「うわぁぁ……」

～～～～～

「さすがバカ柔道部」

宏は溜め息をつきながら言う。

「宏君。」

輝は宏を睨んだ。

「ん？なんだ？」

「とぼけないでよ！もうあきらめてよ！」

「今からでも遅くはない！さあ！」

～～～～～

園芸部

宏「いいから入れよ！」

輝「体鍛えるの関係ないじゃん！」

宏「プランター運び手伝えば筋肉つくぜ！さあ一緒に……ってどこ行った輝ぁぁぁぁぁぁっ！」

〜〜〜〜〜

「宏君。もう陸上部入ったから無理。」

宏はその場に崩れ落ちた。

そんなこんなで部活も終わり、2人はマイペンライへと歩いていた。

「こんな時に長崎カステラとかおやっさん出さないよね。」

輝は喉がカラカラなのである。

「カレーソーダとか出されたらおしまいだな。」

宏は笑いながら石を蹴っ飛ばす。

ブロロロロロロロ

その時、後ろからエンジン音が近づいてきた。

2人が振り向くと……

「「ラミカちゃん！」」

ラミカが仮面ライダーカイザの専用マシン、サイドバッシャーに乗ってこっちに向かってきていた。

「あら！宏君！久しぶりね！」

ラミカがサイドバッシャーを2人の前で止めて、ヘルメットを脱いだ。

セーラー服で少女がバイクに乗っているというのはなんとも不釣り合いな光景だったが不思議と自然に見えた。

「ラミカちゃん！かっこいいよ！」

宏は目を輝かせながらラミカを見上げる。

「これサイドバッシャーじゃん！」

輝は目を見開きサイドバッシャーを眺めていた。

「あなたもバイクに乗りたい？」

突然ラミカが話しかけてきた。

「「乗りたい！！」」

2人は元気よく返事をした。

「よし！じゃあついてきて！」

そう言ってラミカが指を鳴らすと、どこからか灰色のオーロラが現れて、ラミカと輝とサイドバッシャーを包み込んだ。

宏は置いてけぼりにされた。

「……ナンデダヨーーーーーっ」

輝達が飛ばされたのは、自動車教習所のようなとこだった。

「ここは？」

輝は初めて世界を飛び越えたこともあって少しそわそわしている。

「ラミカさーーーん！」

後ろで声がしたので振り返って見た。

「マモルー！連れてきたよー！」

振り向いた先には輝と同じかそれより下くらいの少年がいた。

「チャーッス！」

なんかしょっぱい敬語を使っている。

とりあえず2人はマモルと呼ばれた少年のところまで近づいた。

「紹介するね！こっちは空野　輝。こっちは大地　マモル。」

「よろしく」

「よろしくっす」

2人はとりあえず握手した。

「マモルは機械いじりとかが得意なの。だからあなたのバイク作ってもらったのよ。」

「へぇ～。すっげ～～！」

輝は尊敬の眼差しをマモルに向ける。

「じゃあ早速輝さんのバイクを紹介しますね！」

そう言ってマモルは何かにかけられた布を取る。

輝は目を見開き驚いた。

「トライチェイサーじゃん！」

チッチッチッとマモルは指を横に振りながら言う。

「まだまだ甘いっすね～～。ベースはトライチェイサーっすけど、ちょっと違うんっすよね～」

確かに、トライチェイサーの赤い部分が空色になっていて後ろに何やらちっさめのボックスがついている。

「完全に輝さんのオリジナル機体、トライチェイサーならぬ、スカイチェイサーっす！！」

「すっげ～！かっこいい～～！！」

輝は子供のようにはしゃいでいる。

「ゴウラムとの合体にも対応してるっすよ！」

輝の頭に？が浮かんだ。

「ゴウラムって僕じゃ……」

マモルはラミカと一瞬目配せしてから言った。

「まあ、その辺は後々っす！」

それを聞いて不思議に思ったが、問い直すことはしなかった。

「じゃあマモル君！バイクありがとう！」

そう言ってスカイチェイサーを押して歩く。

「じゃあマモル、今度もよろしく！」

ラミカが指を鳴らして次元の壁を出す。

「さよならーっす！」

そう言って2人はかえって言った。

輝が元の世界に戻ってくると、いきなり怪物に襲われた。

「「うわっ！」」

そこには体にモーターのついたチーターが立っていた！

ビュン！

すごい速さでチーターは逃げ出した。

「あっ待て！」

そう言って輝はスカイチェイサーに跨り、チーターを追いかけた。

ヴォォォォォォォォォン！

スカイチェイサーは速いが、なかなか追いつけない。

（３００ｋｍ以上とかもう無理だろ～～）

輝が諦めかけたその時！

ドン！

横から緑のバイクがチーターを引きとばした！

「ふぅ～間に合った～」

そのバイクには樹木が跨っていた。

「どうしたのそのバイク！」

輝は樹木に近づき問いかける。

「そういえばこれどうした？」

宏も知らないらしい。その代わりに、ジュモクドライバー……ミオが答えた。

「道で拾った！」

（（どどどどドロボーーーーーーっ））

「まあいいや。とにかくアイツ！」

チーターはさっきので結構ダメージを喰らっていた。

「変身！」

輝はクウガに変身してチーターを攻撃する。

「クヌギマグナム！」

樹木はゼンマイで武器を呼び出し、木製のマグナム銃でクウガの援護をする！

「タアッ！ハアッ！ダッ！おぉりゃ！」

凄まじいラッシュの直後すぐ上段蹴りを食らわす。

「輝！ライダーキック行け！」

「ＯＫ！はぁぁぁぁぁぁっ」

クウガが右足にパワーを貯める。

「ドリャァァ！！！」

助走をつけてチーターにマイティキックを食らわす。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

チーターは断末魔と共に爆発した。

「「いぇ～い！」」

２人のライダーはハイタッチをしてそして変身を解いた。

「なかなかやるなぁ～。」

2人の戦いを物影から見ている少年がいた。

「だけどこのままじゃ彼らも持たない。俺も早く出ないと。」

そう言って少年はその場を去った。

彼の手には黒いカードデッキが握られていた。

次回の仮面ライダー空我は!!

転校生!?

僕はベタベタまとわりつくヤツは嫌いなんだ。

こいつは!??

嫌ぁぁぁぁぁっ
ガバッ

変身!

オイ、嘘だろ……

次回、漆黒の転校生

青空を守るために戦え!!

5話：大空へ羽ばたくマシン！（後書き）

意外と長くなりました。反省点は輝がいきなりバイクに乗れたという矛盾点ですね。直す気はさらさらありません。
ミオバイク拾うとかすげーなー。尊敬するよ。

最後に、少し重要なお知らせです。この小説でのコラボを募集しています！もしコラボしたいって人がいたら感想にお願いします！
ではまた次回

スピンオフ：1（前書き）

時間稼ぎと思ってもらって結構ですが、こんな話もけっこう頑張って（↑大して考えてないけど）書きましたので、読んでください。

スピンオフ：1

パート1：これが僕らの空ヶ丘！

日曜午後3時。喫茶店マイペンライが一旦閉店する時間

「ふぅー。疲れた～。」

輝は手伝いを終えて遅めの昼食をとっていた。

ちなみにメニューは沖縄名物のソーキそばである。マイペンライは日本中の名物料理を食べられるというすばらしい喫茶店なのである。

「ねぇ輝？」

小柄で一本毛が跳ねている金髪の少女がソーキそばをすすりながら話しかけてきた。名をラミカ・リュミネートという。

「何？」

輝は具の三枚肉を口に入れようとして、一旦止める。

「そういえば空ヶ丘ってどんなところなの？」

「そういえばまだ言ってなかったね。空ヶ丘はね……８０年代のバブルの時代に東京のまだ開発されていないところを切り開いて作ったニュータウンなんだ。バブルの頃は人口は８千人とか言ってたけどバブル崩壊と一緒にだんだん人も減ってきて、今は２千人ちょっ

とくらいしかいないさびれた田舎町になっちゃったんだ。」

「ふーん。そうなんだ。」

ラミカは再びそばをすする。

「これ食べ終わったら町を案内するよ！」

～3分後～

輝たちはとりあえず外に出た。

「西側に見える高い搭がテレビ搭。通称空ヶ丘タワー！」

「特にこれと言って特徴はないわね。」

「じゃあ次は町の方に行こう！」

～商店街

「ここが空ヶ丘銀座！」

「ここも普通……っていうか店少なくない？」

「肉屋、八百屋、服屋、本屋、文房具屋、ラーメン屋、写真館、なんかの会社、ホビーショップ……本当だ！」

「いつも買い物はここ？」

「マイペンライでの食材はここで買うけど、ほとんどの人が近くのショッピングモールとか行くなぁ～」

「なるほど～。シャッター商店街ってとこね。」

輝たちが引き返そうとしたその時！

「おぉ輝！そっちの子はこれか？」

と言って右手の小指を立てる。

「違うって！ただのお友達だよ！」

輝は顔なじみのようで、普通に会話を続ける。

「ラミカ・リュミネートと言います。」

ラミカは礼儀正しくお辞儀をする。

「おぉ、こりゃどうも。俺は肉屋の原口。よろしくな！お嬢ちゃん！」

そう言ってラミカに特製のメンチカツを渡した。

「おじさん！僕は？」

「無い！」

～しばらく歩いて。

輝）「ここが僕の通ってる高校！」

ラミカ）「都立空ヶ丘第二高校？」

輝）「ああ、公立なのに第二っていうのは、空ヶ丘ができたのと一緒にここに高校が３つできたからなんだ！」

ラミカ）「いろいろ詳しいのね～」

輝）「空ヶ丘が大好きだからね！」

「輝君？」

その時、後ろから声をかけられた。

「あれ？ソラちゃん！？」

輝の顔は一気に真っ赤になる。

（ああ、あの時の。）

ラミカは一度会っている、しかし、その時は時間を止めていたもんで……

「そっちの人は？」

ソラの方には面識はなかった。

「ラミカ・リュミネートと言います。」

例のように、礼儀正しくあいさつをする。

「輝君のお友達？」

ソラは輝の方を向きながら聞いた

しかしその時、目と目があったのがいけなかったのか、輝の頭は真っ白になってしまい、

「うん」

まともに対話ができなくなってしまった。

「良かった…」

ソラは何故か安堵の表情を浮かべた。

「ん？良かったって？」

輝の代わりにラミカがからかうように、問いかける。もちろん意地

悪そうな表情で。

「えっ!?ああイヤイヤイヤイヤベベベ別に何もないですよ?それじゃ。」

そう言ってソラはどこかへ飛んでいった。

（2人共青春してるのね～。）

ラミカは未だに顔を真っ赤にしてボーっとしている輝を見て笑った。ちなみにさっきの言葉は輝が行動不能になったため、全く耳に入っていなかった。

「ほらっ、輝！いつまでもぼーっとしてないで帰るわよ！」

ラミカが軽く輝の背中を叩く。

「ほえっ？」

不抜けた返事を返し、輝は蘇生した。

そしてまた歩きだす。

「そういえばオチなかったね。」

「作者もテストでヤバい点数とってそんなこと考えている暇なんてないんでしょ。」

作者の悪口を言いながらマイペンライへと帰るのであった。

スピンオフ：1（後書き）

いつか空ヶ丘の説明をしなきゃとか思っていたので、ちょうど良かったです。現実世界の話って言ってますけど、実際架空の街ですからね。

もう、やらかした感と申し訳ない感でいっぱいです。来週はしっかりした話を更新しようと思ってます。

感想ヨロです。（書く人はまずいないだろうけれど。）

では（＾＾）／~ ~ ~

6話予告（正式）（前書き）

ちょっとした手違いで次回の話の内容が変わりました。これが正式な次回予告です。

6話予告（正式）

次回の仮面ライダー空我は！

自動運転みたいです。

ノリで運転したみたいです！

逮捕！

俺は門司仁！よろしく！！

アノヤロウ！あいつソラちゃんに手ぇ出してみろぉ…ただじゃおかねぇ！

死ねぇぇぇぇぇ！！クウガぁぁぁぁぁぁ！！！

ガンバライド！ガ・ン・バ！ガンバ！！！

ひえぇぇぇぇぇ！ミオおおおおお。早くうううううう

この世界のお宝は何かな？

次回！ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！！

我（僕ら）の空（あおぞら）を守れ！空我！！

6話予告（正式）（後書き）

次回はログさんの仮面ライダーガンバライド（本当は全部大文字なのですが、スペルに自信がないもんで；）とのコラボです！お楽しみに！

（漆黒の転校生の出番はだいぶ先ですね～。）

6話：ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！（前書き）

今回からログさんの仮面ライダーガンバライド（英語のスペル自身ない）とのコラボです！そして高１２人がバイクに乗れた秘密も明かされます！お楽しみに！

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

前回のあらすじ

「「消えた！？」」

「陸上部入ったからもう無理」

「あなたたちもバイク乗りたい？」

「完全オリジナルのトライチェイサーならぬスカイチェイサーっす！」

「このバイク？拾った！！」

「おりゃあああああああ！」

ドカーン

6話：ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！

「あっネジ巻き！」

そして後ろを振り向いた。
さっきモーターを搭載したチーターが爆発したところには、ネジ巻きが粉々になって落ちていた。

「またか！」

宏が輝の頭を叩いた。

「って！だって今回は宏君がキックしろって言ったから！」

頭をさすりながら答える。

「本当は一回現物を飯島さんに見せた方がいいんだろうけどな～」

「「ハァ～～～～」」

2人はため息ひとつ吐き、自分のバイクに近づいて行った。

ウ～～ウ～～～

その時、どこからかサイレン音が聞こえてきた。

ブウゥゥゥゥン

そして何台かのパトカーが止まった。

「君達。大丈夫だったか？」

そして一台のパトカーから飯島さんが降りてきた。

「はあ、まあなんとか。」

そう宏が答えたとき、あの二台のバイクが飯島の目に止まった。

「このバイクはどうした？」

そう言って3人をにらみつける。

目を逸らす輝と宏

「これオレが拾ってきました！」

窃盗の罪を自白してしまったミオ

宏は頭を抱えた。

「こっちは？」

そう言って飯島はスカイチェイサーのシートに触れた。

「えっと～…それは事情を知ってる知り合いから緊急用にってもらいました。」

（ウソはついてないもんね……）

「2人はどうして運転できた？」

気になるところをついてきた。

「えっと～…自動運転だったので大丈夫でした。」

（そうじゃないと３００ｋｍとか出して急ブレーキかけたら死ぬもんね。）

「輝君。まあ君はいいだろう。」

輝はなんとか許された。

「君達は？」

先ほど窃盗の罪を自白したミオと真っ青の宏を向いた。

（ヤバい～～どうしよ～～）

宏は冷や汗ダラダラだった。

「えっと～～～～～～～～～～～～～～～」

必死に逮捕されない理由を考えた。そして

「ノリです！！」

やってしまった。

この時点でもう宏の脳ミソは限界だった。

「窃盗および無免許運転の現行犯で逮捕する！」

2人はそのまま警察署に連れていかれ長々と説教されたらしい。

ブウゥゥゥゥン

ミオと宏が警察署に連れていかれた後は警察がいろいろと調査をしてた。

「あれわたしといてくれるよね。」

そうつぶやいて今度は安全運転で輝は帰って行った。

黒マントの男はモニターを見て肩を震えさせていた。

「クソおおおおおおおおおおおお！！！」

ガッシャーーーーーン

実験台のような机の上の物を全て床の上に叩きつけ、怒りを露わにしている。

「もう呪いの力なんてどうでもいい。クウガを徹底的に叩き潰せ！アイツらのように二度と戦うことができなくなるまでに！！」

そう言って机の上に残っていたゼンマイを動物の檻の中へ雑に放り込んだ。

「くたばれぇぇぇぇぇ！クウガぁぁぁぁぁぁぁ！！」

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

結局宏君たちはミオが記憶喪失の上世間知らずということで4時間くらい説教されてから釈放されたみたいだった。

何だろ?今日はなんだか空気が澄んでる。まるで空が笑ってるみたいだ。

「やっぱ空ヶ丘は最高だ!」

朝、僕は一番に登校して、まず一番に屋上に行く。空が近いからね!

そして朝の澄んだ空気をお腹にいっぱい吸い込んだときだった。

「あの~君……誰?ここは?」

不意に声をかけられた。

見てみると自分と同じ位の少年が立っていた。よく見るとブレザーの制服を着てる。僕が着ているのは学ランだから、転校生かな?

「僕は空野輝。ここは空ヶ丘第二高校だよ。」

「へぇ～～そうか……」

けど変わった聞き方をしてきたな？まあ、空ヶ丘なんて珍しい名前だし、高校の名前を間違えたんだろ。

「俺は門司仁！よろしく！」

そう言って手を差し伸べてきたので、握手した。

その後仁君に校長室の場所を教えて教室に帰った。

教室にはちらほらクラスメイトの姿があった。

「見て～昨日も怪獣騒ぎだって～」

女子がケータイを覗き込みながら話している。

「オイ、輝、ちょっと！」

クラスメイトの鈴木くんに呼び止められ、そっちの方へ行ってみた。

「このサイトにも書いてんだよ！」

そう言って鈴木くんはスマホをの画面をこっちに向けた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

〜空ヶ丘第二高校裏サイト〜

pn．ハマ

鈴木ってうざくね？

pn．ラビタン

まぢ鈴木氏ね

pn．がっぽれ大佐

マジアイツ学校くんな！空気が汚れる。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

見なかったことにしよう。

確か鈴木くんが言いたいのってこれかな？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

pn．ハッチャケ

この前オレ怪獣見た！

pn.　音速のスリーパー

どうせコスプレだろ？

pn.　ハッチャケ

そういえば、仮面ライダーもいた！確か……アギト？

pn.　音速のスリーパー

それもコスプレだって！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

失礼な！なんでクウガとアギトを間違えるの！？古代の戦士と神の子とは天地の差だよ！

じゃなくて、形はどうであれ、結構広まっているんだな～。バレるのも時間の問題かな～？

キーンコーンカーンコーン

朝のＳＨＲの時間になった。鈴木くんへの誹謗中傷は彼に任せるとして、僕は席についた。一番廊下側の後ろから二番目の席。窓際が良かったな～。

とか思っていると先生が入ってきた。

「きりーつ。れい。ちゃくせーき。」

日直のいかにもやる気のなさそうな号令の後、先生が口を開いた。

「今日はこの１－Ｄに新しい仲間が加わることになった！」

別に転校生が来た、でいいのに……ってまさか！！

「門司君！入って来なさい！」

そうして入ってきたのは、今朝会ったあの少年だった。

「俺は門司仁！得意なことは短距離走です。みんなよろしく！」

「だそうだ。みんな仲良くするように。」

そして彼は席へと案内された……ってオイ！

「門司って変わった苗字ね。」

オノレェ門司ぁぁぁぁぁぁぁ！よりにもよってソラちゃんの隣ぃぃぃぃ！

アノヤロオ…もしソラちゃんに何かやったらタダじゃおかねぇ！

とかなんとかいろいろあってあっという間に5時限目

眠いとか思っていたけど、一瞬でそんなものは吹っ飛んだ。

例のゼンマイ怪人の姿が教壇にはあった。

みんなは笑っていた

「オイ先生そりゃあないぜ！」

「理科の時間だからって怪獣のカッコしなくても」

みんなは事の重大さにまだ気づいていない！

「みんな！逃げ……」

るんだ！と言おうとした時に、もう立ち上がっていたやつがいた。

宏君ではない。

「あらわれたな！怪物野郎！退治してやる！」

「仁君？！」

そう、あの転校生、門司仁がフォーゼドライバーのようなもの、ガイアメモリをもって立ち上がっていた。

＞ガンバライド！＜

メモリのボタンを鳴らし、ドライバーのスロットにメモリを差し込んだ。

3・2・1

「変身！」

そう叫び、ドライバーのハンドルを前に押し出した。

＞ガンバライド！ガ・ン・バ！ガンバ！＜

するとガンバライドのＣＭソングが流れ出し、見たこともない仮面ライダーへとなった。

「フォーゼ……じゃない？」

ベルトにスイッチがついてるところを見るとフォーゼのようにも見えるが、彼の外見は放送前、白いとんがりコーンだの米粒だのと叩かれてきたあんな姿ではなかった。

＞テープオン＜

電子音が流れ、左足の△のスイッチを入れるとテープが現れ、ライオンにトゲのついた怪人をテープでぐるぐる巻きにした。

「どぉりゃあ！」

かけ声一番、テープでぐるぐる巻きのライオンを窓の外へ放り出した！

そしてドライバーのハンドルをまた前に押し出した。

＞ガンバライド！ゲキレツアタック！＜

電子音と共に○×△□のアストロスイッチのスロットのようなゲートが現れた。

仮面ライダーは窓の外へと飛び出し、ゲートをくぐり抜けぐるぐる巻きにキックを決めた！

ドカーン

うおおお～～～

クラスは拍手喝采だったが、それもつかの間だった。

グルァァァァァァ！

今度は犬に鎖鎌を持たせたような怪人が現れた！

キャアアアアアア！

ウワァァァァア！

「宏君！みんなを安全な場所に！」

今の宏君はミオがいないから変身できない。だったら僕がやるしかない！

みんなが行ったことを確認して腹部に手を当てた。

するとアークルが腰に装着される。

左手をアークルに乗せ、左に滑らす。右手は斜め左に伸ばし、ゆっくり右へと動かす。

「変身！！」

そして両手を重ね合わせ、アークルの左側へ押し込む。

そして仮面ライダー空我へと姿を変えた

「オラァ！」

まず相手の鎖鎌を避けて右ストレート！そしてさっきライオンを投げ飛ばしたところから鎖鎌犬を放り出す。

「だあぁぁぁぁ！」

重力を利用してパンチを打ち込む！

＞イリュージョンオン＜

どうやら校庭にはまだ別にも怪人がいるらしく、仁君が変身した仮面ライダーが忍者の姿になり戦っていた。忍者らしくしっかり分身を使っている。

～そのころ、宏は～

「んだよこいつら！」

宏はみんなを体育館に押し込んだ後、怪人から逃げていた。

「ひぇぇぇぇ！ミオぉぉぉぉぉ！早くぅぅぅぅ！」

その時、

ブォォォォン

エンジン音と共に、原チャリに乗ったミオが現れた。

「ホンダズーマ、かっこいい？」

「ミオぉぉぉぉ！かっこいいから早く変身！」

するとミオの体が光に包まれ、変身ベルト、ジュモクギアへと変わった。

宏はベルトを装着すると、左手を真上に上げて、右手でバックルのレバーを掴んだ。

「「変身！！！」」

一声叫びレバーを右から左へ動かす。すると体が木の葉に包まれ、大自然の戦士、仮面ライダー樹木へと姿を変えた。

「今日はこれだ！」

そう言って一本のネジ巻きをバックルにセットする。

＞ガジュマルハンマー！＜

そして木製のハンマー、ガジュマルハンマーを召還した。

「キツネにバズーカってシュミ悪すぎだろ！」

そう言ってからジュモクはハンマーでバズーカを叩き割った！

ギャアアアアア

バズーカキツネは苦しみ悶えている。

「ラアッ！」

そしてゴルフスイングの容量でバズーカキツネを体育館前から校庭までかっ飛ばした。

「輝！お待たせ！」

校庭では４人（一人＋一人×３）のライダーが戦っていた。

「タアッ！オラァ！」

「フン！ダァラ！」

その時！いきなりクウガとジュモクが何者かによって狙撃された。

「「ウワァっ！」」

「この世界のお宝は何かな？」

To be continude

6話：ガンバライドな転校生！レッツガンバライド！（後書き）

クウガとアギトの間違い。知ったかする親戚のおじさんのよくやる凡ミスです。学校にもいます。

こっちはこっちなりで話を進めました。ぜひログさんの仮面ライダーガンバライドも読んでみてください！

では（＾―＾）／~

7話：現実（リアル）か虚構（フィクション）か……（前書き）

前回のあらすじ

「お前ら逮捕だ！」

「俺は門司仁！」

〜鈴木ってうざいよねー〜

≪ガンバライド！ガ・ン・バ　ガンバ！！≫

バシュウウン

「この世界のお宝は何かな……」

7話：現実（リアル）か虚構（フィクション）か……

「だあ！おりゃ！」

「ふん！ヤア！セイッ！」

「だぁぁぁぁりゃあぁぁぁぁ！」

3人の仮面ライダー達が戦っているのを影から見ている者がいた。
年は輝達と同じくらい。チャラついた服装で、目つきは悪い。
手には、黒いカードデッキを持っていた。

「ガンバライド…何故ここにいる……」

『仮面ライダーガンバライド』…仁が変身するライダーである。

「世界が、歪んできている……あいつのせいで……」

そうして少年は漆黒のデッキをさらに強い力で握りしめ、つぶやいた……

「サンノミヤ……お前はなにが目的なんだ……」

♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀

「だあああああ！」

「ぎゃあああ！！」

ずどおおおおん

クウガはマイティキックで鎖鎌犬を辛くも撃破した。

「どっせえええええい！」

どしーーーん！

樹木もハンマーで狐を叩きつぶした。

≪シノビ！ゲキレツアタック！！≫

「「「はあああああ！！」」」

どおおおん！！

ガンバライドもシノビステイツのゲキレツアタックで敵を倒した。

ワアアアアアアアアアア！！！！！！

校舎から歓声が上がった。

「いえーい！」

樹木は調子乗って校舎に向かってピースをした。

しかしライダー達が勝利の余韻に浸っていられたのは一瞬だった……

バシュシュウウウン

「「うわあああぁぁぁ！！」」

クウガと樹木は何者かに狙撃された。

ガンバライドはそれが誰かすぐに分かった……

「ディエンド！お前！……」

「ディエンド？……なんでこんなとこに……」

クウガ達の後ろにはシアンのボディに、バーコードをモチーフとしたライダー、世界を又に掛ける大怪盗……『仮面ライダーディエンド』が自分の武器、縦に平べったい銃『ディエンドライバー』を構えて立っていた。

「後ろから狙ってんじゃねえええ！」

そう言って樹木はディエンドに向かって跳び蹴りをした。

「少しおとなしくしていてくれないかい？」

そう言ってディエンドはディエンドライバーに2枚のカードを装填して、樹木に向かって撃った。

≪ＫＡＭＥＮＮＲＩＤＥ　ＰＳＩＧＡ！　ＲＩＯＴＲＯＰＡＲＳ！≫

するとディエンドライバーから、白のボディ、青のライン、ギリシャ文字のΨをモチーフとした『仮面ライダーサイガ』と、銅色のボディ、灰色の複眼のマスクの3体の『ライオトルーパーズ』が召喚されて、

「どぉえや?!」

樹木におもいっきり体当たりをした。

バッ

そしてあっという間にクウガはライオに囲まれてしまった。

「さて、僕のお宝～～♪」

ディエンドは逃げようとした。

「ディエンドは俺に任せろ！」

そう言ってガンバライドはディエンドを追っかけて行った。

「うわあああ！ヤバイヤバイ！！」

「Ｐｌｅａｓｅ　Ｄｉｅ！」

樹木は空中からサイガに狙撃されていた。

〝打ち落とすならレイニーだよ！〟

ジュモクギアが宏に指示をする。

「そうか！シャワーガンなら！」

そう言ってジュモクは水色のゼンマイを取り出し、バックルに差し込んだ。

≪レイニーフォーム！≫

すると樹木の体は雨にうたれ、水色のボディ、水の力を司るレイニーフォームへと変化した。

「早速お前が死ね！」

ヒーローらしからぬセリフを吐きながら（両方だけど…）レイニーシャワーガンを取りだし、それをサイガに向かってかまえたが、

｛それより、雷マークのボタンを押して！｝

「？。何で」

｛いいから！｝

言われるままに樹木そのボタンを押した。

すると！

もくもくもく……

「……」

宏は雷と聞いてもっと派手なものを期待してたのか、言葉を失った。

今、シャワーガンからは、黒い雨雲のようなものが出ている。

そしてその雨雲はサイガの頭上へ行き……

ゴロゴロゴロ……

どっっしゃあああん！！！！

すごくでかい雷がサイガに直撃した。

「Ｏｈ　ｍｙ　ｇｏｄ！！！！！！」

そしてサイガは落下しながら消えて行った。

「すげえ…俺何もしないで勝った……」

「んにゃろっ！」

クウガはなんとか3体のライオに対抗はしてる。しかし1対3…明らかに不利である。

（こうなったら…）

クウガはライオの武器の短剣に手を伸ばした。そして強引に……

「超変身！！！」

タイタンフォームに変身して、ライオの武器をクウガの武器『タイタンソード』に変えて強奪し……

「おりゃあああああ！！！！」

回転切りでライオを一掃した。

「「「ぎゃあああああ！！」」」

ライオ達は消えて行った。

「待て！ディエンド！！」

ガンバライドはようやくディエンドに追いついた。

「ガンバライドか・・・！」

「ディエンド！ディケイドとフォーゼのカードを返せ！」

ガンバライドは目的を告げた。召喚ライダーを二人に任せてディエンドを追いかけてきたのはこのためである。

「ま、追われるのも嫌だし、これだけ渡すよ。」

そう言ってディエンドは望みどおりの二枚のカードを投げ渡した。

「気が利くやつじゃねぇか・・ありがとよ…って、うわぁぁぁぁぁ！」

突然、二枚のカードが光り出し、世界の壁が出現した。そしてカードはその壁に向かって放たれていった。

もちろん、彼の意識ではない。

「ん～じゃ、楽しんでくれ♪」

≪ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ≫

そして、ディエンドは消えていった。

「今の…一体……」

そう言ってガンバライドは変身を解き、二人の元へ戻った。

「お～い」

仁は2人に声をかけた。

「おお！お前仮面ライダーだったんだな！」

変身を解いた宏が手をふり答える。

「……」

輝は黙っていた。

（ディエンド……何で？……）

「仁君。一つ聞いていい？」

輝は仁に向き直り言葉を吐き出した。

敵の強襲は何度か逢っているが、今回のケースは初めてである。

いきなり現れたディエンド…それを脇目もふらずに追いかけた仁……

――――――――輝に考えられる事は一つだけだった。

「君はこの世界の人間じゃないね？」

「？？？」

宏はなんじゃそらというかおで二人を眺めていた。

「うん。そうだよ！」

仁はまっすぐと輝を見つめながら答えた。

（何だ何だ？二人は何を訳の分からん事を……）

宏は話について来れてなかった。

「やっぱり……」

輝はうすうす感づいていた。

いきなり屋上に現れたこと……

予告無く転校生が来たこと……

全く敵に動じてなかった事……

今まで非日常を経験してきた輝にとってはそれは十分過ぎる情報だった……

ウゥーーーウゥーーー

先生が呼んだのか、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

「今日はもう学校もないかもね……教室もどろ！」

輝はいつもの調子で仁を手招きして校舎へと足を向けた。

そして午後は臨時休校になった。

♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂♀♂

～～マイペンライ～～

仁はここに泊めてもらう事になった。

仁の話だとこういうことだそうだ……

仁はある日、ガンバライドをしようと思い１００円を入れてカードを買ったところ、『仮面ライダーガンバライド』のカードが出てきて、そのままガンバライドの機体の中に吸い込まれ、元の世界に戻るために必要なゾーンメモリを見つけるべく、色々なエリアを渡って行くうちにここにたどり着いたらしい。

「なるほど……」

輝はコーヒーのカップを置きながらため息をついた。

仁が現実（リアル）の世界の人間だったというのは驚きである。

（今空ヶ丘に何が起こっているんだ？）

輝は考えた。今までの事を。

屋上でラミカにアークルを手渡された事

次元を超えてバイクを取りに行ったこと

ミオと樹木の存在

ねじ巻き怪人

全て現実（リアル）世界で起こっていること……

（アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！）

考えれば考えるほど現実（リアル）と虚構（フィクション）の区別がつかなくなってくる。

「暇だしゲームでもする？クラヒフォーゼ買ったんだ！」

とりあえず落ち着こう。考えるのはそれから。

二人は輝の部屋がある二階へと上がった。

「もう一人連れてくるね！」

仁を部屋に案内してから、ラミカの部屋へと行く

「ラミカちゃ～ん。ゲームしよ～」

こんこんとドアをノックする。

……

しかし反応はなかった。

「ラミカちゃん?」

輝は部屋に入った。すると、ちゃぶ台の上にある一枚のメモ用紙が目についた…

「?」

輝はそれを拾い上げ、読んで見た。

仲間が戻ってこいというので、一旦元の世界に戻ります。

でもすぐ戻ってくるので部屋は空けといて下さい。

ps　あの子を泣かせちゃだめよ!輝

「そういや見てたっけ。」

ため息をつき、部屋を後にした。

しばらく戻ってこない……輝の心は、いなくなって寂しい気持ちと、異世界の人間が去って行く事への安堵感でぐちゃぐちゃになっていた。

そしてその後、二人はゲームを楽しんだ。

≪スキャニングチャーーーージ！≫

［セイヤーーーーッッッ！！！］

テレビから音声が鳴り響く

（本当にここは現実世界なんだな―）

なんてことを思いながら輝はコントローラーを動かしていた。

つかの間の日常

しかし次の戦いで、輝は現実（リアル）へと戻って来れなくなる……

♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂♀↗♂

暗い道…少年は、死んだ目で、スマホの画面を眺めていた。

～空ヶ丘第二高校裏サイト～

pn. ハマ

鈴木ってうざくね？

pn. ラビタン

まぢ鈴木氏ね

pn. がっぽれ大佐

マジアイツ学校くんな！空気が汚れる。

これを見ているのは、この画面に悪口を書かれている鈴木である。

「何で俺が……管理人なのに……どうすれば……」

頭をわしわし掻きながら考えていると……

「そこのお前・・・。」

（！！！）

鈴木は絶句した。何故か。声を掛けたのは……

「何??怪人?」

サソリを思わせる怪人だったからである。

「我は、スコーピオン・ゾディアーツ。このネーミングセンスのない悪口を書いたやつが憎くないか……？」

少年はうつむきながらつぶやいた…

「憎いよ……」

するとスコーピオンゾディアーツは少年に丸くて黒いスイッチを渡しながら、言った。

「なら、このスイッチで無限の力を手にするか…？復讐ができるぞ…？」

そのスイッチは、『仮面ライダーフォーゼ』の世界の敵、ゾディアーツが変身に使うアイテムであった。

「欲しい・・・。そのスイッチ欲しい・・。」

「これは無料でやる。だから、思う存分使え…。星に……願いを……。」

鈴木はボタンを押す。

すると、熊の姿をしたゾディアーツが現れた。
名を、ベアー・ゾディアーツという。

「うがあああああ！！！」

鈴木……ベアーゾディアーツは咆哮を上げた。

「もう…この世界に用はない……」

スコーピオンは別の世界に消えていった。

次回の仮面ライダー空我は！！

「みんな死んじまえばいいんだよおおおおお！！！！！！」

「鈴木……」

≪クウガ　オン≫

「はあああああ！！！」

「そろそろヤバイかもな……」

次回　別れと出会いは突然に

決めろ！友情のゲキレツアタック！！

7話：現実（リアル）か虚構（フィクション）か……（後書き）

1ヶ月って……更新遅れてごめんなさい。

このお話は、『仮面ライダーガンバライド』本編と少し、（いや、かなり）違うので、読み比べてはどうでしょうか。

ラミカ一時退場！そして謎の新キャラ！次回どうなる！？

更新、停滞しないように頑張ろうとおもいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2914w/

仮面ライダー空我　～青空の勇者(ニューヒーロー)・青空の伝説(ニューレジェ

2012年1月4日02時48分発行